Relief

［リリーフ］

2019 OCTOBER
Vol. 37

CONTENTS

- 第９回公募助成成果発表会
- 2019年度公募助成活動紹介
- 2019年度AED訓練器等助成活動成果報告会
- AED訓練器等助成活動紹介
- 2019年度第２回･第３回･第４回いのちのセミナー
- あしなが育英会活動紹介
- 2020年度公募助成のお知らせ

公益財団法人 JR西日本あんしん社会財団
JR-West Relief Foundation

第9回公募助成成果発表会を開催しました

2019年7月30日（火）、2018年度に活動いただいた団体・研究者の皆様による公募助成成果発表会をホテルグランヴィア大阪にて開催しました。ステージ発表とポスター発表に分かれ、活動36団体、研究者2名のあわせて全38組の方々に活動や研究の報告をしていただきました。

ステージ発表（発表順）

発表団体

特定非営利活動法人　インターナショクナル

【テーマ】
災害時非常食のアレルゲン情報データベース構築と対応訓練ワークショップ

（菊池 信孝さん）

災害時にアレルギーがある被災者が非常食を安心して食べられるように、食材情報データベースの構築や非常時の対応力向上のためのワークショップを開催した活動について発表していただきました。

サバイバルサロン　ぷれぜんと

【テーマ】
性犯罪の被害者たちが輝かしい人生を歩む

（柳谷 和美さん [左]/
ヤマト ミライさん[右]）

性犯罪・DV等の被害者が被害を乗り越え豊かな人生を歩むため、サロン会や講演会の開催、被害者・加害者にならないための子どもや青少年向けの教育プログラムについて発表していただきました。

認定特定非営利活動法人　障害者放送通信機構

【テーマ】
緊急災害時における聴覚障害者の情報伝達保障支援活動

（西田 浩文さん [左]/
梅田 ひろ子さん[右]）

災害時に聴覚障害者に対する情報伝達が確実に行えるよう、行政機関や放送局等と協力し「目で聴くテレビ」を活用した防災訓練を実施し、広く防災意識を高めた活動について発表していただきました。

大阪府大規模災害リハビリテーション支援研究会

【テーマ】
被災地でリハビリテーション支援活動を行うための人材育成と組織作り

（冨岡 正雄さん[左]/
松岡 雅一さん[右]）

災害時に震災関連死や生活不活発病を予防し、円滑なリハビリテーションの支援活動ができる人材を育成するため、研修会や震災体験者によるシンポジウムを開催した活動について発表していただきました。

みわのわ

【テーマ】
みわのわ 福島県双葉郡こどもサマーキャンプ

（西村 公貴さん）

福島県双葉郡の子どもたちを福知山市に招いてのサマーキャンプの開催や福島の状況を学ぶ勉強会やボランティアをする子どもたちの養成など、地域の防災力向上にも取り組んだ活動について発表していただきました。

はすの会

【テーマ】
家族や愛する人を失った方々を支える

（山下 文夫さん）

大切な人を亡くした方を対象とした勉強会や茶話会の開催、医療職や看護学生などグリーフケア提供者のための研修会を実施した活動について発表していただきました。

LFA食物アレルギーと共に生きる会

【テーマ】
食物アレルギーの人の災害対策

（大森 真友子さん）

食物アレルギーがある人の災害対策と支援ネットワーク作りのために、食物アレルギーにも対応できる防災炊き出し実習や緊急時対応の講習会を開催した活動について発表していただきました。

特定非営利活動法人　Salut

【テーマ】
つながるmarche！2018フォーラムの企画・運営・開催及びフォーラム講演録の小冊子化・配布

（吉川 陽子さん[左]/
水谷 友香子さん[右]）

地域の互助機能を高め、安心できる地域づくりのために、障がいのある人への災害支援や災害とジェンダー問題をテーマにしたフォーラムを開催し、内容を冊子にし配布した活動について発表していただきました。

発表研究者

大阪電気通信大学　教授　平沼 博将さん

【テーマ】
教育・保育施設等における重大事故および安全管理に関する調査研究

教育・保育施設で発生した子どもの事故に関して、重大事故の特徴と要因を明らかにするとともに、広く質問書による調査や実地調査を実施し、保育現場の実情を踏まえた実効性のある事故防止策を提案した研究について発表していただきました。

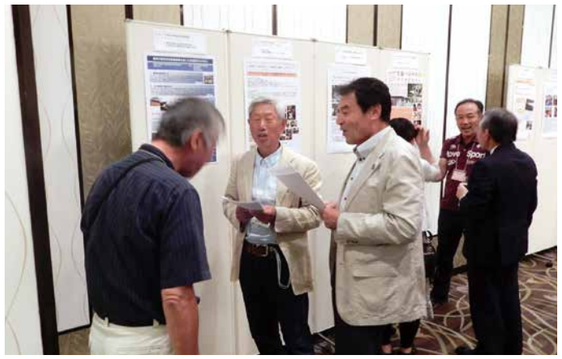
立命館大学　准教授　豊田 祐輔さん

【テーマ】
駅周辺地域の災害時帰宅困難者対策へ向けた連携防災計画策定能力向上を目指した訓練ツールの開発

災害時の帰宅困難者対応に関して、人が集まる鉄道駅周辺地域の避難誘導上の課題を明らかにし、鉄道やビル管理会社、行政などが連携し対応するための訓練ツールを開発した研究について発表していただきました。

交流会場でのポスター発表

活動団体８組、研究者２名のステージ発表の後、28組の団体に交流会場でポスター発表を行っていただきました。ポスター発表では、発表者同士で積極的に意見交換を行い、お互いの今後の活動の参考とされている光景が見られました。



交流会場でのポスター発表

発表ポスター前でのインタビュー

特定非営利活動法人　ママふぁん関西

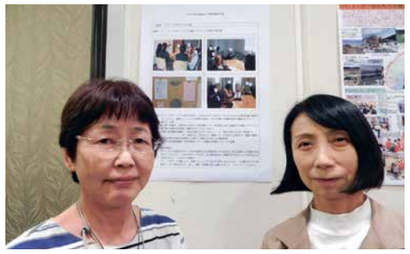
これまで災害発生時に備え、地域の親子の繋がりを大切にして防災情報発信を行ってきました。防災教育活動を通じて大阪の北摂地域の行政や地域コミュニティの広がりを感じています。今後は、2018年6月に発生した大阪北部地震での経験を生かし、アレルギー対策についても積極的に活動を行っていきます。

（戎 多麻枝さん [左]/ 辻 由起子さん[右]）

グリーフサポート　ラル大津

社会ではまだまだ認知されていないグリーフサポートを行っています。地域の行政を通じた広報活動により講習会や茶話会などの参加者も増え、広がりを感じるとともに、少しずつ社会から理解が得られるようになっていると感じています。今後も地道なグリーフサポートを行うことが私たちの役目だと考えています。

（山村 早百合さん [左]/ 諫早 道子さん[右]）



笑顔つながるささやまステイ実行委員会

福島県で暮らす親子を篠山に招いています。昨年度のイベント参加者が今年も参加され、その方の一人から「ささやまに来るとほっとする」とのお言葉をいただきました。また、参加者の方々からこのような支援活動を長く続けてほしいとの声もありました。2012年度から活動を開始し今年で8年目になります。今後もがんばりたいと思います。

（中村 伸一郎さん）

第9回公募助成成果発表会を終えて

発表者、聴講者あわせて約100名の参加がありました。日頃の活動や研究に対する皆様の強く熱い思いが感じられ、大変有意義な会となりました。ご参加いただいた皆様、誠にありがとうございました。

2019年度公募助成活動紹介

2019年度公募助成団体の9月までの活動（イベント）内容をご紹介します。酷暑のなか、活発に活動されています。

ビリーブメントケアチーム「ビリーブ」

7月7日（日）

カフェ「ビリーブのじかん」

子どもを亡くしたご遺族の方が気軽に参加し話が出来るカフェを毎月開催している団体です。今回は6名のご遺族の参加がありました。
本団体のメンバーも同様の経験を持ち且つ研修を積んでおり、参加者とともにお茶を飲みながら和やかに、自由に語れる雰囲気がつくられていました。辛さ故どこにも外出できないというご遺族に対し、個別訪問を行い、次のステップでこのイベントへ参加いただくことを位置づけており、参加者が心地よく過ごせるように様々なご事情にも配慮しているとのことでした。また施設の手入れの行き届いた草花も好評で、会場環境にも気を配っているのが印象的でした。

グリーフサポートラル大津

7月13日（土）

第2回連続講座/
遺族会の役割について

大切な人を亡くした方々に対するグリーフケアを目的とした月1回の定例会やカフェを行っている団体です。今回は年間4回開催される連続講座の第2回目で「遺族会の役割について」が開催されました。
大切な人を亡くした時、悲嘆、怒り、絶望、苦悩、身体の不調等が生じつつも、生活を続けなければならないという、ご遺族の心理状況の変化や遺族会での役割などの講義があり、その後自己紹介を含めた語りの場が作られました。さまざまな立場の方々の話を聞き、自らの体験を話し、その場を共有するという地道な活動ですが、地域との連携を保ち、今後も一層の取り組みをしていただきたいと感じました。

特定非営利活動法人エンディングノート普及協会
〔平成30年7月豪雨特別枠〕

7月26日（金）

災害時の福祉避難所・福祉施設の現状 ～あなたは専門職として、個人として何をしますか?～

昨年の西日本豪雨でボランティア活動を行った時に、福祉避難所のあり方に疑問を感じたのをきっかけに、「プロボノ支援者を増やし、復興を支援すること」を目的に活動している団体です。参加者23人はそれぞれ現役の看護師、介護士、防災士でした。最初に講師による避難所と福祉施設の現状と問題点について、テレビニュース映像も取り入れた説明があり、質問形式で参加者に考えさせる方法で進められました。活動は平日の19時から行われたにもかかわらず、多くの方が参加し、活動終了後にも講師への質問が後を絶たないなど、参加者の熱意がとても高い印象を受けました。

揖西北まちづくり協議会（いっさいきた）

7月28日（日）

真備町のその時、そして今

西日本豪雨で被害の大きかった倉敷市真備町でボランティア活動を行った兵庫県たつの市の団体により、被災者を招いた報告会が開催されました。最初に被災者から、避難した時の状況など体験談が語られ、その後参加者との意見交換を行いました。200名以上の参加があり、関心の高さがうかがえました。会場では被災写真・防災グッズの展示や、非常食の試食なども行われました。また体験談の中で、男性被災者が車いすの妻と共に避難した際、町内会の世話役から安否確認と避難できる介護施設を案内してもらい、大変お世話になったと声を詰まらせながら語ったシーンがあり、地域連携の重要性を改めて認識させられました。

笑顔つながるささやまステイ実行委員会
〔東日本大震災特別枠〕

8月10日（土）

笑顔つながるささやまステイ

2015年から毎年、原発事故による放射能の影響などに不安を持つ福島県の親子を招く、保養キャンプを実施しており、今年度は5世帯21名が参加しました。学生のボランティアのほか、食事作りやマッサージ、カウンセリングなど様々な得意分野をもつ方々がボランティアとして参画し、参加者が少しでも自然を満喫できるような体制がとられていました。保護者の方々は「気兼ねなく川遊びができるのは非常に貴重だ」「子どもたちを見守ってくれるボランティアも多く、保護者だけのプログラムの時間帯でも安心して任せられるので、心からリラックスできる」などの声がありました。川で蟹や魚を捕まえたり、ブランコで遊んだりしている子どもたちの笑顔と、暖かく見つめる保護者のまなざしが印象的でした。

びわこ☆1・2・3キャンプ実行委員会
〔東日本大震災特別枠〕

8月16日（金）

びわこ☆1・2・3キャンプ
in 2019夏

原発事故の影響を受けた地域の親子を滋賀県に招き、保養キャンプを実施している団体です。約1か月にわたるキャンプ期間中は、琵琶湖や川で水遊びなど、自然の中で思いっきり遊ぶのはもちろん、子ども達の自主性を高める目的で、子どもが企画・運営を担う手作りの「子ども夏まつり」が開催されました。「子ども夏まつり」開催に向けて、子どもたちは前日から模擬店の看板やまつり会場の装飾作りを行い、当日は食べ物の模擬店で提供する食事の支度や販売を行うなど、自主的に行動している姿が印象的でした。また、会場の周辺の地域住民も多く参加しており、子どもたちと地域との交流が深まり地域の活性化にもつながるイベントになっていました。

子ども サバイバルキャンプ 実行委員会

8月17日（土）

子どもサバイバルキャンプ

奈良県上牧町の桜ヶ丘公民館及び桜ヶ丘東公園グラウンドで2日間の日程でキャンプが開催されました。今回で6回目を迎え、開会式には町長などの参加もあり、地域を挙げての取り組みとして行われました。自然災害に限定せず、災害にあった時の自助・共助によりいのちを守り生き抜くための様々に工夫されたプログラムが準備されており、溺れた人を発見した場合の助け方の訓練や、ルーペでの火起こし、バケツリレー競争など、様々な訓練体験が行われました。内容の工夫に加えて、指導的役割の方の適切なリードにより大勢の子供たちを的確にまとめており、その運営力も素晴らしいと感じました。

虹色の音 〔平成26年広島市土砂災害特別枠〕

8月20日（火）

追悼講演・音楽ライブ「この日を忘れない」

5年前の土砂災害の日に合わせ、「この日を忘れない」と題した追悼講演と音楽ライブが行われました。受付には向日葵の花が用意され、自由に献花ができるようになっていました
当日は近隣区域に警報が出るほどの豪雨があり開催が心配されましたが、雨の中訪れた参加者を前に準備をした曲を熱唱、特に経験を重ね合わせてのさだまさしさんの歌は参加者の心に訴えるものがありました。災害から5年となるこの日、福知山線列車事故の遺族である自身の5年時点の心境を踏まえての語りが一層後押しをしているようでした。繰り返し参加している方も多数いるようであり、地元に定着した活動だと感じました。

NARA Will 奈良県立医科大学 学生災害ボランティア グループ〔東日本大震災特別枠〕

8月22日（木）

2019学生ボランティアバス復興支援活動

医療に従事することを目指す奈良県立医科大学の学生ボランティア団体が、4泊5日の行程で「ボランティアバス復興支援活動」として和歌山県立医科大学の学生団体と共同で被災地を訪れました。
南相馬市内にあるデイケアセンターにて、あやとりや折紙で楽しく遊んだり、じゃんけん大会を開いて場を盛り上げるなど、被災者が笑顔になる活動を行っていました。参加者は震災後は家族と離れ単身で暮らす人が多く、若い人と会話が出来るのが楽しいという声もありました。
今年で卒業する学生達も大変熱い志を持っており、社会に出てもこの経験を活かしてほしいと強く感じました。

次世代エネルギー研究所

9月1日（日）

ドローンを用いた地域防災訓練

9月1日（防災の日）に和歌山県印南町の切目川ダム付近でドローンの活用方法の実証実験を取り入れた防災訓練が行われました。山間部の土砂災害時における孤立被災地を想定し、ドローンにより被災者へ衛星携帯電話、AEDを届けるもので、当日は印南町の役場、消防、警察の方々を始め、地域の方々を交えた大規模な訓練でした。近年、ドローンの使用は様々な分野で取り組まれており、災害時、人が到達できない場所へ迅速に必要な救援物資を届けることに効果的であると実感しました。今後、訓練のアンケート調査、検証を行い、他の地域での訓練や情報発信も計画されています。社会的・技術的な課題を踏まえ、実用化に向けた取り組みを期待したいと思います。

大阪大学 災害ボランティア サークルすずらん 〔東日本大震災特別枠〕

9月2日（月）

被災地での地域活性化ツアーおよび民泊の実施

8月31日から5日間の行程で大阪大学のボランティアサークルのメンバーに、地元の大学生やNPO法人からの参加者を加えた11名が参加し被災した地域の活性化を目的とした活動が行われました。
参加したメンバーは野田村にて民泊（ホームステイ）をしており、村のお年寄りや民泊先の村民、村長なども参加する交流会が開催されました。震災後大きく人口が減り、中学卒業と同時に村を出るという傾向も強まっており、村の方々も孫に会うような感覚で毎回の民泊が非常に楽しみであるとのことでした。過疎化した村に大学生が滞在することにより、被災地のお年寄りを励まし、地域の活性化に繋がる非常に良い影響を与えていると感じました。

ポコズママの会関西

9月5日（木）

ワークショップ付ポコズカフェ

流産・死産・新生児死などの理由で小さな赤ちゃんを亡くしたご家族のためのお茶会「ポコズカフェ」が開催されました。第1部では、アイシングクッキーを作るワークショップを行い、参加した仲間と楽しく過ごすことでお互いの緊張を和らげ、安心できる雰囲気の中で、参加者の皆さんのアレンジを加えた可愛いクッキーができあがりました。
第2部では、同じ経験をした仲間と一緒に語り合うお茶会を実施し、自身の体験を語り、泣いたり笑ったり、気持ちを分かち合いながら、我が子と向き合う時間を過ごしました。この会が終わった後には、笑顔が少しずつ出てくるなど、表情や心にも変化が見られたことが印象的でした。

2019年度AED訓練器等助成活動成果報告会を開催しました

2019年7月14日（日）、AED訓練器等助成活動成果報告会をグランフロント大阪カンファレンスルームにて、28団体46名の方の参加のもと開催しました。
当日は2016年度から3年間の助成期間を終了した8団体への感謝状ならびに記念品の授与、代表団体による活動状況についての発表のほか、今後の活動の参考としていただけるよう救急救命の現状について、当財団AED訓練器等助成事業審査委員会の久保山委員、中山委員、溝端委員による講演を行いました。

助成期間を終了した8団体からの声の紹介

117KOBEぼうさいマスター育成会議

117KOBEぼうさいマスター育成会議は、阪神・淡路大震災の記憶と教訓を次世代に伝えることを目的に2014年夏に発足し、丸5年を迎えました。震災を経験していない大学生で「117KOBEぼうさい委員会」を組織し、自ら企画したワークショップ等を通じて同年代の若者や子供たちに「備え」の大切さを呼び掛けています。各種啓発イベント、防災・減災音楽フェスなどへの出展では、心肺蘇生やＡＥＤ体験コーナーを開設し、助成いただいた機器を来場者が実際に操作し、学べる場を提供しています。また、消防機関と連携した市民救命士講習を開講しており、災害時に行動できる人材の育成に取り組んでいます。今後も多くの方々のご支援、アドバイスを頂戴しながら、防災・減災に触れる機会の提供とともに、救命の連鎖に貢献し得る人材の育成に取り組んでいきたいと考えています。

大阪市立墨江丘中学校

本校は大阪市住吉区にある全校生徒約500名の中規模校です。部活動も盛んで、教職員も日々熱心に指導をしています。教育活動の中では、保健体育科の中で応急処置の授業があり、助成いただいた機器により、実践的でより身につくような指導ができました。また、助成期間の3年間において、同区内の中学校と合同で区民まつりへ出展するなど、活動の範囲が地域へとどんどん広がっていきました。また、他校からＡＥＤ訓練器を貸してほしいといった要請や、講習を実施しに行くなど、教育現場においても活動の需要はあるのだと強く感じました。今後も積極的に活動を進めていくことで、たくさんの人にいのちの大切さを考えるきっかけとなってもらえればと思います。私自身もこの活動を通じて、たくさんの体験や学びを得ることができました。本当にありがとうございました。

北区救急ボランティア

北区救急ボランティアは、阪神・淡路大震災をきっかけに、「困っている人がいれば、近くにいる人が手助けをする」気持ちを持っていただくことを目的に結成しました。具体的には、AEDを使った心肺蘇生法を体験してもらう機会をたくさん作っています。元気な大人だけでなく、中高生、赤ちゃん連れのお母さん、赤ちゃんや小さな子どもを預かるファミリーサポーター、聴覚障害者、在日外国人など、誰でも対象にしています。提供していただきましたAED訓練器と訓練用人形を使った心肺蘇生法体験会は非常に人気があり、有効に活用させていただいています。
今後も、できるだけ多くの方を対象に、分かりやすい心肺蘇生法体験会を行います。

けやき台自治会

けやき台地区は三田市にあり、1992年からUR都市機構等によって開発されたニュータウンです。2019年3月現在では、3,197世帯、9,366人が暮らす地域であり、けやき台自治会では、とんど焼き、夏祭り、防災訓練、作品展、住宅地パトロール、AED講習会等を通じて住みよい地域社会づくりを目指して活動をしております。提供していただきましたAED訓練器と訓練用人形を用いて2016年度より開催しておりますAED講習会は、3年間で受講者数898名、開催回数41回となっております。地域住民の高齢化、自治会離れ等課題山積ですが、AED講習会を通して、救命に関する知識や技術を身に着けるだけでなく、地域住民が顔見知りとなる機会を少しでも多く増やし、「地域の絆」を強化していきたいと考えております。

神戸常盤大学

神戸常盤大学は、医療従事者および教育者・保育者を志す学生約1300名が集う大学であり、2020年度には診療放射線技師養成のための学科もスタートします。人命に直接かかわる職業を目指す集団であること、さらに震災の被害が甚大であった神戸市長田区に位置すること等を踏まえ、原則として新入生全員に対し、初年次教育の一環として「市民救命士講習会」を毎年開催しています。
さらに、AED/CPRを学んだ学生ならびに教員は、各種イベントを通して地域の方々に普及活動を行ったり、近隣の学校へ出張し講習会を開催したりしています。このAED訓練器等助成事業により、我々のプログラムは大いに支えられました。この3年間、本当にお世話になりました。ありがとうございます。今回の助成事業によるご支援を踏まえた上で、今後とも学生への研修および地域貢献活動を継続していきたいと思っています。

西宮市甲子園二・三番町自治会防犯・防災部 西宮応急手当グループ

私たちが活動を始めた頃は、一次救命処置やAEDの必要性などを説明しても、聞いていただける方は少なかったと思います。当時は、講習会を開催するのに手作りのチラシを1軒ずつポスティングしたのを思い出します。
今日、このような活動をされているみなさんが一堂に会して、情報交換ができる日が来るなんて夢のようです。活動を頑張ってきて本当に良かったと思います。これからも、助成いただきましたAED訓練器と訓練用人形を有効活用し、活動を継続してまいります。AED訓練器等の助成、および感謝状や記念品を授与いただきまして、誠にありがとうございました。

社会福祉法人 白寿会

社会福祉法人白寿会は、地域に根差した事業を進めていくことを理念に掲げ、大阪市西成区を拠点に高齢者福祉関連の入居サービスや、高齢・障がい者の方を対象とした相談事業、各種在宅サービス、研修センター等を運営しています。地域の皆さんに育てて頂き、当会で養ってきた職員の専門性をさらに役立てるため、「緊急時対応！～救命講習～」を地域向けに企画しました。
応急手当普及員の資格取得職員が、助成していただいたAED訓練器と心肺蘇生練習用人形を使用し講習を行いました。助成期間の3年間はあっという間でしたが、これからも今まで以上に『救える命を救う』『愛する人を救う』という気持ちを皆に伝えられる活動を継続していきたいと思います。ありがとうございました。

学校法人森ノ宮医療学園 森ノ宮医療学園専門学校

森ノ宮医療学園専門学校は、1973年に大阪市東成区に創立した鍼灸師・柔道整復師を育てる専門学校です。私たちは、実際の医療の現場で活躍できる治療家を育てることを創立以来の教育方針としています。よって、患者さんにもしものことがあった時に適切な対処が取れるよう、心肺蘇生やAED等の救命処置の授業も力を入れてきました。専門学校のため、大阪を中心とした関西圏の高等学校ともご縁があり、様々な高校様などから救命処置についての授業を行って欲しいとの依頼をいただいております。このような救命処置の授業にはAED訓練器や訓練用人形が不可欠であり、このAED訓練器等助成事業はとても助かりました。おかげさまで数多くの高校の生徒や教職員の方々に、救命処置に関する啓発活動を行うことができました。今後も広く啓発活動を行い、講習を広げて行きたいと考えています。

AED訓練器等助成活動紹介

2019年7月から9月にかけて、各地で開催された救命処置の普及啓発活動の講習会を訪問しました。
各地で取り組む、助成先団体の活動の模様をご紹介します。

7月 6日（土） **一般社団法人 のあっく自然学校**

枚方市のサプリ村野にて、団体が主催する子供向けキャンプのリーダー役を務める「キャンプカウンセラー」に対して、救急法の講習会が行われました。冒頭、死亡事故の事例紹介を行い、安全確保の重要性に対する意識を高めた後、実践的な救急法についての解説が行われました。怪我や熱中症への対処法のほか、強いアレルギー反応が出た時のエピペンの使用方法や喘息用緊急薬剤の吸入器の使用方法など、実際のキャンプの場面で発生する事例を中心に、豊富な経験を踏まえた具体的な説明が行われ、非常に実践的な講習会でした。

8月 6日（火） **けあらん**

神戸市中央区の神戸サンボホールにて、ランナー向けの施設を運営している「ランナーズステーション神戸」の会員を対象に講習会が開催されました。冒頭、主催者から昨年のマラソン大会で実際に一次救命処置をした体験について話があり、次に、スライドを用いて「救命の連鎖」の重要性や心肺蘇生法（胸骨圧迫）・AED使用方法について講習が行われました。その後、AED訓練器と訓練用人形を用いた実技が行われ、救える「いのち」を救うには勇気を持って一歩を踏み出すことが大切であるという主催者の思いを強く感じる講習会でした。

8月22日（木） **特定非営利活動法人 おうみ救命プロジェクト**

滋賀県立北大津養護学校にて、学校の教職員を対象とした講習会が開催されました。医師や看護師、救急救命士、理学療法士などで構成されている団体のメンバーの指導により、前半は救命処置の一連の手順に関してDVDを視聴しながら、簡易な心肺蘇生トレーニングキットを用いて行われました。また、後半は少人数のグループに分かれてAED訓練器と訓練用人形を用いて実技が行われました。参加した教職員は真剣な表情で受講しており、日頃よりしっかりと訓練されている様子が伝わり、自分たちの手で子供のいのちを守りたいという意識の高さを感じました。

8月24日（土） **117KOBEぼうさいマスター育成会議**

神戸市中央区の人と防災未来センター屋外ひろばにて、「HAT減災サマーフェス2019」が開催され、一般市民に対して一次救命処置の重要性を知ってもらうためのブース出展を行いました。ブースでは、AED訓練器や訓練用人形を用いて、心肺蘇生法を体験していただくコーナーを設け、家族連れや地元の子供たちなどが多く参加していました。開催日が夏休み中の週末ということもあり、ブースには、待ち時間ができるほど大変活気がありました。

8月27日（火） **矢田山町自治連絡協議会自主防災会**

大和郡山市の矢田山町地域スポーツ会館にて、矢田山町婦人会と大和郡山市城ケ丘自主防災会のメンバーを対象に講習会が開催されました。指導者は応急手当普及員の資格を持つ団体のメンバーが行い、冒頭はスライドを用いた講習を実施し、次に少人数のグループに分かれて実技を行いました。受講者の中には、普段「普通救命講習会」を行っているメンバーも参加していたため、実技の時間や質疑応答においても活発な意見交換が行われ、大変有意義な講習会となりました。

9月28日（土） **京都防災士works**

京都市左京区の岡崎公園にて、「バディウォーク®京都」が開催され、一般市民に対して一次救命処置の重要性を知ってもらうためのブース出展を行いました。ブースでは、AED訓練器や訓練用人形を用いた心肺蘇生法の体験コーナーを設け、胸骨圧迫を行う場所、深さ、リズムなどについて参加者に体験していただきました。なお、「バディウォーク」は全世界300ヶ所で開催されている大きなチャリティーウォーキングイベントであり、イベント当日は子供から大人まで多くの方が参加し、大変活気がありました。

2019年度　第2回･第3回・第4回 いのちのセミナー

今年度の「いのちのセミナー ～さまざまな いのちに向き合い いのちを想う～」は全8回開催予定ですが、その第2回を8月2日（金）に、第3回を8月23日（金）に、第4回を9月5日（木）に、それぞれ毎日新聞オーバルホールにて開催しました。その講演内容の一部をお届けします。

第２回いのちのセミナー
講師：宮田 修氏

第３回いのちのセミナー
講師：大津 秀一氏

第４回いのちのセミナー
講師：金菱 清氏

会場の様子

第2回いのちのセミナー

日本人は“いのち”をどう考えてきたか

～神道から見た「いのち」～

講師：宮田　修氏
千葉県熊野神社宮司　元ＮＨＫアナウンサー

NHKアナウンサーから神主へ

10 年ほど前まで NHK でアナウンサーをしておりました。1970 年に NHK に入り、各地の放送局で勤務し、大阪には計 7 年間勤務しました。1995 年の 1 月も大阪放送局の勤務で 2 府 4 県の朝のニュースを担当していました。朝の 4 時半に起床し、放送局に入り、ニュースの準備をし、昼までニュースを担当するという生活をしていました。阪神淡路大震災の日もそうでした。そういう時間帯に放送局に入っていますから、その日も一番早く着いたアナウンサーでした。そしてあの第一報を伝えることになったのです。

アナウンサーをやっておりますと結構ストレスがたまります。そのため、休日を利用し、ある時期から、千葉県の田舎にセカンドハウスとして古民家を借りて過ごす生活をしていました。その家も生活も大変気に入っていました。

ところがそこには大きな落とし穴がありました。その古民家の家主が神主だったのです。その夫婦に後継ぎがいなかったことからなんと私にその神主を継いで欲しいと嘆願されたのです。

退職後を条件に引き受けたのですが、神主に資格がいることは知りませんでした。仕事をつづけながら通信教育で勉強を開始することになったわけですが、この勉強が本当に面白かった。なぜ面白かったかと言うと、日本人がこんなことを考えていたのかということが次から次へと出てくるんですね。神主は日本人の伝統的な考え方を勉強するわけです。その教材は、「古事記」「日本書紀」そして「万葉集」。先人が残した書物を読むのです。そういうわけで、日本人が長い歴史の中で「いのち」というものをどう考えてきたかということをお話しいたします。

伝統的な日本人の考え方とは

私は子供のころから、自分のいのちは自分自身のものだと考えていました。ところが伝統的な日本人の考え方はそうではないんですね。私がいまここにいるのは、両親、その両親と遡り、悠久の過去からいのちを繋いできたからこそだと。大きな衝撃を受けました。悲しくも途中で亡くなられる方もいらっしゃいますが、私たちはそういう大きなつながりの中の今を生きており、そのいのちとは自分自身のものではなく、お預かりしているものだということなんですね。

次に、日本人の生き方に欠かせない共同体ついてお話しさせていただきます。

縄文時代の後期に、日本人のお米作りが伝わりました。弥生時代に入ると水を引く技術が確立され、これによって日本人は計画的に食料を保存しておくことができるようになったわけです。それまでは明日の食料が手にできるかどうかわかりませんでしたから、このお米作りによって、先ほど申し上げたいのちを繋ぐということが可能となりました。

そのお米をつくるために当時の日本人は何をしかたと言うと、共同体をつくるわけです。小さな共同体を作ってお互い助け合いながら米をつくります。それが日本人の気質というか、原点になっています。皆さんの DNA、遺伝子の中にもしっかり書き込まれています。そうか、私はこういう存在だったんだと教えられ、日本人のさまざまなことに対する考え方の基礎になっていることがわかりました。

ですから、共同体というのは皆が仲良くすることが大事なのです。それだけお米作りが円滑に進みますから。そして春先、お米が沢山とれますようにと、共同体にお招きした神様にお願いします。これが春祭りです。秋になり、「お米が沢山取れてありがとうございました」「今年は不作でしたが来年はよろしくお願いします」と神様にお礼やお願いなどを言う、これが秋祭りで、そういう生活をずっと続けていたんですね。その共同体にお招きした神様というのが、神社の原点なのです。ですから、日本各地に神社は無数にありました。

初めは共同体の適当なところに祭壇をつくって神様にお願いをしていました。春と秋にお祭りをするのにいろいろ道具が要ります。その道具をしまっておくための倉庫をつくったんです。お招きした神様に住んでいただくためのお家をつくったんです。それが社、神社なのです。

そういう生活を送ってきたので、日本人は共同体の中で仲良くし、共同体のつながりの中でお互いのいのちを補い合う。一生懸命助ける。こっちが困ると誰かが助ける。だから、ご近所はみんな助け合うんですよ。ところが、今はやめてしまっていませんか。

阪神淡路大震災のとき、神戸市長田区の真野地区というところがありましたが、街中の至る所で火災の火の手が上がる中で、その地区だけは火災が殆ど起きていません。それは何故かといいうと、真野地区には共同体が残っており、バケツリレーで小さな火のうちから、火を消すという活動ができたんです。お互いのいのちをみんなで助け合うという日本人の心構えがあの地区には残っていたのです。

2011 年に東日本大震災が起きました。ただ、あそこでは津波で犠牲になる方は少ないと発災直後は思いました。あの地方には地震が来たら津波に襲われるということが共同体の中の長老などから言われているはずだから犠牲者は少ないと思っていましたが、事実は違いました。言い伝えられていないんですね。

私は今千葉県の田舎に住んでいますが、ここは共同体が残っています。そこの神社で私はお祭りをします。最後に直会（なおらい）という打ち上げパーティーのような宴があるのですが、宮司として氏子さんたちと様々な話をします。そのときに必ず申し上げるのは、「ここには日本の伝統的な共同体が残っています。それを是非大切にしてください」ということです。

伝統的な日本人らしさを

私は、私に神主になって欲しいと頼んでいただいた前任の神主さんにいま大変感謝をしています。当時は断り切れなくて引き受けたわけですが、伝統的な日本人の考え方を学び、本来の日本人に戻ることができ、多くの皆さんにも本来の日本人に戻っていただけるよう、このような話をさせていただいています。自分たちは独立した存在だ、独自に生活すればいいじゃないかとおっしゃる方もいるかもしれませんが、どこかに無理があるわけで、やっぱり、日本人は日本人らしく、お互いに助け合って、お互いに心の中を見せ合っていくのがいいと思いませんか。私はそう思っております。

第3回いのちのセミナー

死ぬときに後悔しないために

～緩和ケア医からみた大切なこと～

講師：大津　秀一氏

早期緩和ケア大津秀一クリニック院長

人間の死亡率は100%

私たちはなぜ死ぬのかとは深い問いだと思います。医学的に言えば私たちの体は老化し最期を迎えることは規定されています。再生医療が進めば臓器を取り換えることは可能かもしれませんが、頭は問題ですね。ですからそう簡単には死なない世界にはならないと思います。そういうわけで人間の死亡率は100%だと言われています。

人の亡くなる経過のパターン

人が亡くなる経過にどういうものがあるかについて論文が出て話題になりました。癌で亡くなる経過については、実際芸能人の方もぎりぎりまでテレビに出たりするので感じるかもしれませんが、癌は比較的元気な時間が長い病気です。そして最後の2か月くらいで急に悪くなるという経過を辿ります。認知症や老衰に伴う病気で最期を迎えるケースも増えてきています。本当にちょっとずつ衰弱し、最後は静かに終焉を迎えるという経過を辿るのが認知症や老衰のパターンと言われており、着地点はわかりにくいです。心臓や肺の病気については良くなったり悪くなったりを繰り返すので、これも着地点はわかりにくいと言われています。ですから、癌の場合は悪くなることがある程度わかるわけですが、それ以外は何時最期がくるかはわからない話であり、人の最後は予測できないので、そこから考えると悔いが無いように生きていかねばならないと思います。

緩和ケアについて

緩和ケアとは、「いのち」を脅かす疾患による問題に直面している患者とその家族に、体•心の問題、社会的な問題、スピリチュアルな問題を早くから発見し、的確な評価と対処を行い、苦しみを予防し、和らげることで生活の質を改善することです。

かつては癌の治療をしていて有効な治療ができなくなると、緩和ケアやホスピスの時期ですと言われて切り替わるのが通例でした。最近は最初から並行してやっていきましょうということなのです。痛さ、苦しさにさいなまれては生きる意味も揺らぎ気持ちもまいります。人との関係も上手くいかないかもしれません。是非皆さんががんと診断されたら、こういう緩和ケアを最初から受けられないかと動いてみてください。

通常の治療に加え緩和ケアを定期的に行ったグループとそうでないグループを比べたら、前者の方が命が長かったという結果も出ています。緩和ケアを適切に受けると命にも影響するということが示唆されたわけです。

そういう現場に日々いる中で、一人ひとりが悔いのない時間を過ごしてほしいと思ったのが、「死ぬときに後悔すること25」を出すきっかけです。25じゃ足りないという皆さんに向け26以降というのも作りました。

どんなものが多かったと思いますか？「死ぬときに後悔すること25」を出した出版社がアンケートを取りました。皆さん今死んだら後悔することは何かと。そうすると、一目瞭然ですが、家族絡みのことが多いのです。言うは易しですが、ご家族との関係を大事にして、悔いがないようにやっていただくことが重要だと思います。

家族と患者さんの印象的な話

私が京都のホスピスにいたときに担当した大腸がんの患者さんの話を紹介します。

70歳の独身男性、見るからに研究者という方でした。最初は私の年齢が随分下であったこともあり、様子を伺っても「何や学生か」と言われたり「悪いところはない」と横を向いたりで対応に随分悩みました。そんな方でも次第に病状が悪化してきたので、ご親類の方に知らせなければということで、ご家族のことを訊ねました。ところが「わしには家族なんていないわ」の一点張り。でも調べると秋田にお兄さんがいらっしゃることが分かりました。聞くと「知らせなくていい。わしは一人で死ぬんだ」と言うのみ。私たちは悩んだ末、ある日の夕方、秋田のご実家にお電話をしました。するとすごく高齢のお兄さんが応答し、「（こちらの用件に対し）わかりました」とだけ言い、ガチャンと電話が切れたんですね。何十年も会ってないからこんなもんか…しょうがないなと思いつつ、翌日、当直明けに病棟から「先生、ご家族が来られました！」と。杖をついたお兄さんが来ているんですよ。秋田から、電話をした翌朝にですよ。「先生、弟の具合はどうですか。もしかして弟は先生の言うことを聞いていないんじゃないですか」と。よくわかっていらっしゃいました。弟さんと面会するなり、凄い声で励ましていかれました。患者の弟さんも兄に対しては全く別人のように言うことを聞いていました。

励ましの甲斐あり一旦回復した病状も再度悪化し、最期の時が近づいてきました。「何かあったら連絡してください」と、お兄さんに頼まれていたので電話をしました。そしたら翌朝、また居るんです、お兄さんが。目を閉じていることが多くなった弟さんのもとにかけつけ、呼びかけると、「何だ兄貴か」「何だじゃないだろう…」、そんな状況でしたが、お兄さんは最期まで横にいらっしゃいました。「先生ありがとうございました。弟と色々な話ができました」「『ほんとう、兄貴、楽しかったな、ありがとうな』という言葉を確かに聞きました。何十年と弟に会うことができず、自分の中でも気にかかっていましたが、最後にこういう機会を持ててありがとうございました」と。

これは私が「死ぬときに後悔すること25」の最終章で「愛する人に『ありがとう』と伝えなかったこと」の下りに記した話で、これは大事な人に「ありがとう」と言え、後悔のない最期を迎えることができた話の紹介でした。

2周目の人

胃がんの60歳代の男性の方で、私どもの病院に運ばれてきた方の話です。聞くと前の病院の医師から余命2か月と診断され、慌ててやりたいことをノートに書いたとのこと。家族と色々することもあるけど何もやっていない…と60日で完結するようプランを組まれたところ、全部やり終え、現在やりたいことの実行の2周目に入っているとのことでした。全部やり終えたと思ったら長生きしちゃいましたと。その後2周目も終え、3周目まで実行されました。その方に学ぶべきは、精一杯生きること、準備することの大切さだと思います。自分にとって何が大事なのかを探し続けて実行し悔いを残さなかったことは、健康な我々にも相通じるものがあるのだろうと思います。

おわりに

自らの生きた証を残そうと友人に宛てた手紙を書いた17歳という若さで世を去ることになった女性や、自分らしくお洒落に生きたいと、最期まで沢山の洋服を持ち込み、毎日違う服を着てお洒落を楽しんだ女性の方もいっらしゃいました。

本当に沢山の命と触れ合いながら思うことは、やっぱり後悔がないように一生懸命生きるということだと思います。人とはきっと誰かから色々なものを受け取り、皆さんもこういったバトンを次につないでいくんだと思います。

第4回いのちのセミナー

夢と幽霊から見た『緩やかな』死の受け止め方

～東日本大震災という問い～

講師：金菱　清氏

災害社会学者　東北学院大学教授

死んだら終わりですか

津波にさらわれた震災の遺族にとっては亡くなっているのはわかりながら、果たして私の愛する家族や友人は本当に逝ってしまったのかという問いをずっと抱え込んでいます。「遺体すら見つかっていないのに法要をしなければならない。今も戸惑い受け入れられない自分がいます」などの言葉に出会うわけです。

私がなぜ夢や幽霊に辿り着いたかといえば、震災後、そうならざるを得ないような現場があったからで、それについてこれからご紹介します。

仙台市の隣に名取市閖上という場所があり、津波の難から逃れるために多くの人がここの中学校を目指して走り、その途中で多くが犠牲になりました。その学校の机にこう書かれていました。「町の復興はとても大切です。でもたくさんの人たちの命が今もここにあることを忘れないでほしい。死んだら終わりですか。生き残った私たちにできることを考えます」と。この問いの答えは書かれていません。読んだ人それぞれが考えなければならない問いだと思います。学生に聞いたところ、死んだら終わりという回答は8割にとどまりました。つまり2割は死んでも終わりでは

ないと考えていることになります。このことからも今回の大震災において、死者とどう向き合ってきたかということに着目する必要があったわけです。

幽霊現象

石巻市のタクシードライバーが見た幽霊現象の事例を紹介します。

1件目は、震災から3か月後、初夏にもかかわらずファーのついたコートを着た女性を乗せ、求めに応じ目的地に向かいながら、その目的地が更地であること、コートを着ていることなどについて尋ねるやり取りをしたところ、「私は死んだのですか」と震えた声で答えてきたという。驚いたドライバーが後ろを振り返るとそこにはもう誰も座っていなかったという事例です。2件目は、3年後の6月、ダッフルコートに身を包んだ青年を乗せ、不意に「彼女は元気だろうか」と問いかけられ、ドライバーが気づくと青年の姿はなくなっており、代わりに恐らく彼女へのプレゼントなのだろう、リボンがついた小さな箱が置かれていたという事例です。

いずれも実際にメーターの運賃が発生しており、具体的な会話とか接触などがあるところが大きな特徴で、リアリティーを感じます。

宗教学など既存の学問に当てはめると、幽霊は二度と出てほしくなく、たたりや不成仏なので直ちに供養しましょう、という話になりますが、この両ドライバーは幽霊の無念の気持ちをすくい取ってあげられるのではないかと肯定的、好意的に受け止めています。犠牲者、特に行方不明者にとっては、こちらの世界かあちらの世界かを選別することが出来ず、苦痛である多くの人が存在するということなのだと思います。

例えば、パソコンのデスクトップに貼ってあるファイルや写真は、とっさに必要かどうか判断できず一時的に捨てずに保管しているものがよくあります。この一時的にという感覚が幽霊現象の理解に必要なのだと思います。一時的に預かる領域をつくる工夫を人間は行っていて、彼岸か此岸の世界に区分するのではなく、曖昧なものを曖昧なままでいいんじゃないと伝えてくれているのではないかと思うわけです。

壮絶な現場の状況は、映像などで伝えられる部分からかなり落とされています。ご遺族が遺体を見つけるシーンの手記を紹介します。「（ブルーシートが開かれ母親の遺体と対面）お母さん、お母さん寒かったね、と声をかけながら拭いてあげた。お母さんどんなに恐ろしかっただろうか、どんなに寒かっただろうか…（中略）…母に毛布を掛けて温めてあげたかったがその毛布すら準備してこなかった。なんて気の利かない娘だと思ったかもしれない。それでも何とかしたくて小さなタオルで首を覆ってあげた」。

遺族の方々にとっては、絶対に忘れてはならないという一種の強迫観念のような思いと、それでも薄れてしまう自分の記憶や感情の狭間で、とても重苦しい葛藤を感じている方が多く、これだけ愛していたと記録に書くことにより一時的に保管でき、記録を開けばその思い出が蘇り、自分も楽になるという。カウンセリングと違い痛みを解消するのではなく、痛みを温存する方が大切なのだろうということが分かってきたわけです。

亡くなった方宛の手紙を書いてもらったこともあります。そこには伝えたくて仕方がない想いが書いてあるわけです。普段、私は人にインタビューをして何かを学ぶということをしていますが、その想いに行きつくことは無理だと感じました。インタビューは第三者に語るため死者という当事者はいません。しかし手紙は当事者である相手に対し全て感情移入でき、寄り添うということを越えたものとなっており、話す機会がなかったか、話すべきではないと閉じてしまった人達の声が表れているものだと思っています。

夢まで会いに来てくれた

そのような手紙の多くに登場する「夢」について紹介します。「（亡くなった奥さんと）指切りしながら『何もしてあげられないよ』『でも信頼している』『急がないから』『待っている』確かめるように話をした。『あの世から簡単に助けることはできない。こっちに来るのを待っているから、そっちの世界で修業をしておいで』と妻に言われているような気がしました。指切りをした手の感触は鮮明に覚えています。」

また別の方の夢は「クリスマス時に（1歳で）亡くなった息子とスタジオで写真撮影をした。出来上がった写真は背も伸び中学生のような背格好だった。前夜、寂しいと言っていたから会いに来てくれたのかもね。神様素敵なクリスマスプレゼントをありがとう。」

一般に夢はすぐに忘れてしまいますが、遺族の夢はこのように鮮明な明晰夢であることが多いわけです。そして何らかのメッセージを持っていたり、過去に留まらず、現在進行形で何らかの助けを乞うたり、自分と一緒に生きている現在進行形に変える力を持っています。遺族はどこか社会から認知されず孤立無援なところがあり、まさに夢によって助けられるというような孤立“夢”援というものが現場から見えてきたのかなと思っています。

能楽の世界と本日のテーマ

能楽師の安田登氏は言います。「初めに順行する我々の時間があり、それを遡行するような時間に乗っ取られていくことにより、過去・現在・未来を往来するタイムマシンのように永遠の時間を実感できるものが能楽である」と。これは近代的な時間の概念とは違うものであり、これが既に中世に完成していたことに驚かざるを得ません。

そんなことを考えながら、近代的時間管理下で時計に縛られた生活から少し距離を置いてみると、亡くなったから即座に供養とかあちらの世界に送るということを必ずしもせずに、そのまま一緒に生きてもいいのではないか、自分が納得するときに送り出せばいいのではないか、そのように思うわけです。それが本日のテーマの「『緩やかな』死の受け止め方」だと思っています。

あしなが育英会 活動紹介

当財団では「こころ」「いのち」の問題に取り組む団体の活動に助成しています。
その一つに「あしなが育英会」があります。今回、あしなが育英会が運営している施設「神戸レインボーハウス」の活動である「高校奨学生のつどい」と「キャンプのつどい」を訪問しましたので、ご紹介します。

あしなが育英会は、保護者が亡くなったり、著しい後遺障害のため働けない家庭の子どもたちを、広く社会からの支援によって、物心両面で支えることで、「暖かい心」「広い視野」「行動力」「国際性」を兼ね備え、社会に貢献するボランティア精神に富んだ人材を育成することを目的として活動している民間非営利団体です。

高校奨学生のつどい

あしなが育英会から奨学金を受けている高校生が対象の全国8会場で行われる3泊4日の「つどい」です。高校生と世話役の大学生など10人程度のグループで行動し、野外活動やグループワークを行いました。

今年度、関西地区では淡路島にある「淡路青少年交流の家」で開催されました。「君らしく Let's Try」をテーマに高校生が自分の過去や現在を見つめ、将来の目標を見つけ出せるよう、現役の大学生が自分の専門分野の模擬講義を行う仮想大学というワークショップや海外留学生と交流する国際色豊かなプログラムも実施されました。今回は、世話役として参加した大学生の「つどい」に対する想いを聴かせていただきました。

集合写真

仲川 碧（えめ） 追手門大学3年

私は小学三年生の時に、お父さんを病気で亡くしました。大学進学を機に、あしなが育英会から奨学金を受けたことをきっかけに、「つどい」に参加させていただいています。「つどい」に参加した時、自分と同じ境遇の高校生の「心の声」を聞いて、共感できる場面がたくさんありました。当時の私の体験を話すことにより身近に感じてもらえたように思います。「つどい」に参加したからこそ、過去を振返り、現在を理解し、未来への「ありたい姿」に向えました。今回参加した高校生が、大学生になって再び「つどい」に参加してくれると凄く嬉しいです。こんな自分でも、少しは役に立てたかなと。こういう「つながり」が大切だと実感しています。

参加した高校生の声

- 初めて「つどい」に参加しました。最初は行きたくない、帰りたいと思っていました。でも、自分の辛い過去を話しているとき、大学生のリーダーが、やさしく背中をさすってくれ、すごく嬉しかったし、すごく心強かったです。
- 初めて参加したとき、初対面の人と生活をするのは、勇気がいりました。今年で3回目の参加ですが、私にとって夏の楽しみになっています。来年は、希望大学に合格し、リーダーとして来たいです。

キャンプのつどい（海水浴のつどい）

姫路市の家島諸島にある「いえしま体験センター」で、小中学生の遺児を対象に、2泊3日の「つどい」が開催されました。テーマは、「心のケアと成長を促すために『心の居場所』になろう」です。2日目の午前中には、5班に分かれて大学生のファシリテーターによる進行で、「家や学校で話せないことを話そう」と、親を亡くした時のことや親との思い出などを共有し、話したことや感じたことを作文や手紙、絵に描きました。

午後からは、子どもたちが楽しみにしていた海水浴が行われ、施設の前にあるビーチで泳いだり、砂浜でビーチフラッグやスイカ割りなどをしました。都会と違う自然豊かなすばらしい環境の中で、子どもたちの活き活きとした「笑顔」を見ることができました。

集合写真

参加した小・中学生の声

- みんなに出会って、お父さんやお母さんがいない人がたくさんいることを知った。みんなと話も合ったし、楽しいこともできた。
- 最初はあまり話すことができなかったけど、いろんな人から話を聞いたり自分の話をしていくうちに、心が開けてきました。
- 学校で困ることとか、思い出とかいろんな話ができました。悲しい話もあったけど、みんなが一生懸命聞いてくれてうれしかった。

2020年度 公募助成募集のお知らせ

事故や災害などに起因する心身のケアをはじめとした身近な「いのち」を支える活動及び研究を応援します！

助成テーマ	● 事故、災害や不測の事態に対する備えに関する活動及び研究 ● 事故、災害や不測の事態が起こった後の心身のケアに関する活動及び研究 ●「東日本大震災」「平成26年広島市土砂災害」及び「平成30年7月豪雨」（西日本豪雨）による災害に関する被災地・被災者支援活動［特別枠助成］
助成期間	2020年4月1日から2021年3月31日までの1年間
助成金	活動1件 70万円以下　研究1件 200万円以下
応募期間	2019年10月1日（火）～11月14日（木）（厳守）
募集要項	募集内容の詳細や助成団体の活動はホームページ（https://jrw-relief-f.or.jp/）でご確認ください。
ポイント	① 助成金は活動及び研究の開始前（2020年3月下旬）にお渡しします。 ② 活動及び研究経費全額の助成も可能です。 ③ 助成活動及び研究に必要なアルバイト代なども対象となります。 ④ 助成対象団体に法人格の有無は問いません。

最近の主な助成事例

【活動助成事例①】
テーマ：家族を支えるグリーフ活動

内容　幼いいのちを亡くされた家族の心のケアを目的に、悲嘆の状況に応じたピアサポート茶話会の開催のほか、講師を招いたセミナーを開催する。

【特別枠助成事例】
テーマ：被災地救援活動及び避難所等での傾聴活動

内容　西日本豪雨で被災した地域の支援及び避難所・仮設住宅での傾聴ボランティア活動を行う。

【活動助成事例②】
テーマ：災害避難時の食物アレルギー対策

内容　食物アレルギーなどがある被災者が、災害時でも安心して食事ができるよう、配慮した防災食作りや必要な知識共有を行う。

【研究助成事例】
テーマ：教育・保育施設等における安全管理の調査・研究

内容　教育・保育施設の事故やヒヤリハット事例などの調査・分析により、保育事故の実効性のある防止策を研究する。

アンケート実施中

毎号、皆様からご好評いただいておりますReliefにつきまして、いつもご感想をお聞かせくださり、ありがとうございます！今号についてのご意見やご感想もお待ちしております。
（https://www.jrw-relief-f.or.jp/enquete/）

広報誌「Relief」 2019年10月号(vol.37)
【表紙写真：2019年度公募助成団体『揖西北まちづくり協議会』が開催した真備町の様子を報告する会で、歌を披露するたつの市の子ども達の様子】
Relief(リリーフ)には「ほっとする、安堵。安心」といった意味があります。当財団は、「安全で安心できる社会」の実現を目指した事業に取り組んでいます。

編集発行／公益財団法人JR西日本あんしん社会財団
〒530-8341 大阪市北区芝田二丁目4番24号　TEL：06-6375-3202
ホームページ：https://www.jrw-relief-f.or.jp/

Facebook　ホームページ

編集後記
今年も公募助成成果発表会が開催されました。各団体が活躍された成果の発表をお聞きし、少しでも助けになっていることを改めてうれしく思いました。来年度も公募助成の申請が始まります。皆様のお申込みをお待ちしております。（イ）